

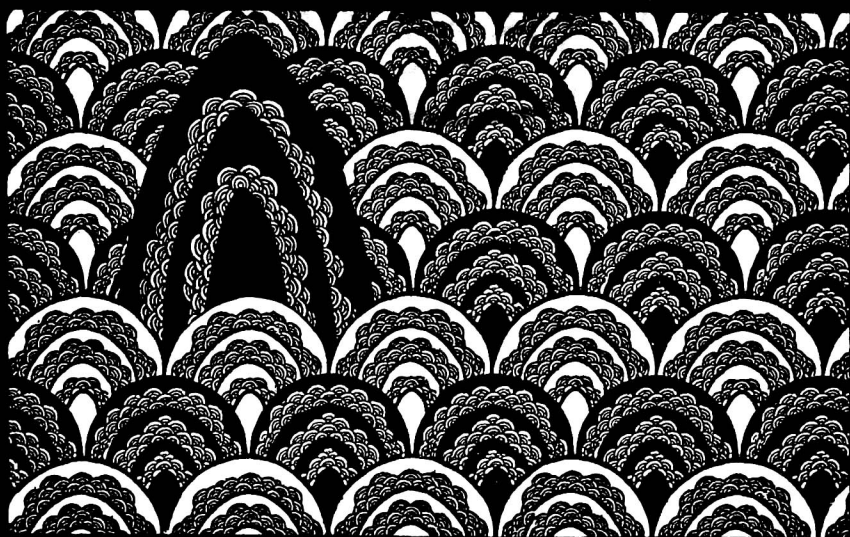
金石範

人山鳥

I

金石範
火山島
I

火山島
I
金石範



火山島 I

昭和五十八年六月十五日 第一刷

著者 金石範

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

(二〇二)東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三三)二六五―一二一一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 大日本印刷

製本 和田製本

定価 二五〇〇円

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

目次

第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章	序 章
-------	-------	-------	-------	-----

321	195	97	15	5
-----	-----	----	----	---

装丁
田村義也

火山島
I

序章

石の突き出た新作路（幹道）に車輪を噛まれながら走る
おんぼろバスのフロント越しに、海に絶壁を削り立てた沙
羅峯の丘が見えてきた。

右手に望める海岸部落に、白く荒れる暗い海が溢れるよ
うに迫っていた。左の沿道は黒い火山岩の碎石を積み上げ
た石垣がバスと先を競うように続いていて、その向う側は
青い麦畑のひろがりだった。

はるばる蒙古大陸のほうからやって来た季節風は朝鮮半
島南端の済州海峡を渡って、島の絶壁や山々につくかる。
風は白堊の灯台がある標高百数十メートルの沙羅峯の断崖
に頭を打ちつけて狂い、海をえぐり返しながら沙羅峯の上
を駆け抜ける。それは畑を丘を曠野を渡って島の中央にそ
びえる漢軍山（一九五〇メートル）に向う。

沙羅峯を蔽った若い松林は風の方向に姿勢が曲ってしま
った不自然な恰好で枝をからませ海の波のように荒れる。
頂上の附近を鴉が数羽、風にあおられるように飛んでいた。
山麓の芝生のなかに黒々と露出した熔岩脈の上を灰色に蔽
いながら、火山灰を含んだ砂塵が風に乘って雲のように湧

きながら飛ぶ。

沙羅峯は漢軍山を主峯にしてこの島の到る処にそびえて
いる四百余りの側火山の一つだった。この土地のことばで
「オルム」と呼ばれるこれらの側火山の頂上から海を一望
すれば、波間にちたつく小舟でも見分けることができる。

側火山と側火山のあいだにはかならず海岸部落ができてい
るが、これらのオルムでは、遠い昔からしばしば烽火が上
った。この島を最後の拠点として、蒙古（元）侵略軍とそ
れに屈服した高麗政府軍を迎えてたかった三別抄軍（高
麗時代、崔氏政権がつくった強大な家兵、夜別抄の左右部隊と神
義軍の通称。後に元の侵略に対する手強い抵抗軍となる）の故事
もさることながら、オルムごとの烽火台に倭寇発見の煙や
烽火が上ると、漆黒の夜半にも村人たちは手製の武器を取
って家をとび出したという。

バスはまもなく沙羅峯の麓に近い乾川の白いコンクリー
トの橋にさしかかった。両岸に崖が迫った川底は磊々たる
岩床で、あちこちのくぼみには透明な池ができていたが、
風に叩かれて波が立っていた。

この何日かまえまでは風がやんでいて暖かく、今年は春
の訪れが早そうだと人々はいった。部落の家々をかこんだ
石垣の陰にすでに金盞花が咲きかけ、路傍に春の気配がし
ていたのだった。ところが気まぐれな陽気は何日も続かな
かった。ふたたび激しい季節風とともに寒さがぶり返して
きたのだ。しつこい風はもう何日も、まるで吹き止むとき

がないかのように続いていた。海を渡った風が漢軍山にあたって雪をもたらず。石の下に吹きこんでそれを転がし砂を飛ばすという、「走石飛沙」の風が吹きまくると、たいいてい天はぶ厚い陰気な雲を張ったままになる。海はガスをはらみ海面まで垂れ下ったような空に向って、白い牙を突き立て軀をおどらせて咆哮した。こういう日々のうちの風の弱まったときをえらんで、海豚たちが沙羅峯の崖の下に暗い海に何百と群れて集まってきた。もんどり打って海に飛びこんでは浮かび上り、とがった背びれを立ててたわむれる海豚の黒い大群は、まるで無気味な動く島のように見える。やがて風が去って嘘のように波がおさまると、海の水はまことに美しく、遊泳する魚群の色や形が見分けられるくらいに、水中が明るく揺れ透明になるのだった。

風が吹きつづき、はるかな山ではまた雪が降った。空を埋めた雲の層で山腹まで閉ざされた漢軍山の広大な山麓が真っ白になった。

新作路に沿った黒い石垣はほとんど途切れずに続いていた。はるか畑の向うにはゆるやかなスロープを形成した広大な曠野がひらけ、漢軍山の雄大な雪の山麓のひろがりには抱きこまれていた。

バスの破れガラスから砂塵が吹きこんで、乗客の咽喉をがらがらにし、吐き出す痰を真っ黒にした。運転台の後ろに坐った南承之は蟹の目玉のように大きく突き出たバックミラーを見ていた。四十がらみの運転手が空咳を繰返した

がら汚れた軍手の片手をハンドルから離して、ガラスの曇りをふく。そばに立っていた若い車掌がボロを手渡した。運転手は黙って受け取ってふたたびそれでガラスをふきはじめた。バスは城内へ向っていた。くたびれたナツパ服の南承之は麦わら帽をかぶり、先端の割れていない朝鮮式の地下タビをはいていた。色あせた麦わら帽の（この島の人間は年がら年中麦わら帽や、薄い竹で編まれた麦わら帽の形をしたベレンイをかぶっていた）小さな穴のあいた天辺からささくれ立った毛髪がのぞき、破れ目や広いつばからはつれた糸が垂れている。

彼は運転台から眼を離すと、うつむいてじっと考えこんでいるふうになった。いや、麦わら帽にさえぎられてよく見えないその顔は、居眠っているようにも見える。ただ、その陽焼けして浅黒い両顎の張った引きしまった顔付きの顔には疲れが見えた。頬骨の肉が削げてへこんだ陰に疲れがたまっているようだ。しかし寝不足らしいやや充血してうるんだような眼は興奮に近い光を放ち、慎重に動くが、はたと瞑想的に静まる。なかなかいい顔だった。濃い眉毛、しっかりした小鼻の発達したりっぱな鼻、いくぶん色を失って白っぽく荒れているが、少年のようにふくらんだ唇は形がよかった。

彼のまえには大麦三斗入りの唄が置いてあった。その上には隣りに坐っている農夫の同じくらしいの大ききの荷物が、運転台の後ろの仕切りを背にして重ねられていた。そばに

支械（背負い具）が倒れていた。支械は車体の動揺でなんども倒れなんども立てかけられたのだが、ついに脚を他の荷物の端に突っ張って斜めに倒れたままになった。バスはこのような荷物に大半の場所を取られて満員の状態だった。しかし立っている人はほとんどいない。各自の荷物の上に腰を下したり尻を乗せてもらったりして、たばこを吹かしながら雑談をしていた。痩せた老人が悠々と伸ばした一メートル近いキセルの先端にきざみたばこをなんども親指で押して、詰めこんだ。そして一本のマッチを節約するかのよう、たばこを吸っている人の顔のそばに黙ってキセルの先端を近づけて火を移す。人々は老人に敬意を表する。自分たちの頬や肩にあたりかねない長いキセルの動きを妨げないために、周りの者たちは肩をすくめて空間をつくってやった。床に坐っている一方のグループには女たちがいた。男たちと同じように荷物の上にまたがって坐り、裳でまえを隠した彼女たちは、冗談をいいはじめると男たちに負けていなかった。

女たちはけらけら笑いながら、夜這いに失敗した村の男の話をしていた。三十まえに寡婦となって数年操を守ってきている女のころへ、ある晩村の色男が忍びこんで思いを遂げようとした。ところが待ちかまえていた親戚の男たちに見つかって外へ放り出され袋叩きにあったというのだ。余りいい寄るので、寡婦は仕方なしに一計を案じたのに、間拔けな男は女のずるさを知らなかったのだというわけだ。

った。どうというほどの話でもなかったが、男たちは黙っていた。いかなかった。

なあに、そんなことは分かるものか。生娘が傷つけばそれや見分けもつくだろうがな、フトンのなかですることある現場でものぞかねえと、だあれも分かりはしねえだぞ。もうちゃんと、そのまえにできてたかも知れんからな。うむ……、あるところに生娘がいた。それがある日、母親にこんなことをいった。ねえ、おっ母さん、このまえまでは小便をすると、ちよろちよろという音が聞こえたのに、このごろは小便をすると、勢いよくじゃあじゃあという具合に聞こえるんだよ、おっ母さん。母親が驚いて眼を丸くした。というのはな、母親には昔の覚えがあったんだ、娘と同じようなな。そこで母親は、なあ、おまえ、おまえはきつとだれか男といっしょに寝たんだろ？ と訊いた。あらっ、おっ母さん、と娘はこれまた平気なもので、はたと手を打ちながら、おっ母さんはまるで神さまみたいによく知っているじゃないのといったもんだ。いつてみればだよ、黙っていればばれもしないことを、まるで春先の雉がかってに鳴いて人間に居場所を教えてやるようなものさ、ひひひっと卑猥な声をあげて、男たちも負けていなかった。

おんぼろバスは揺れた。車内の人間も荷物の上に横倒しになったりする。人々はひっくり返りながらも大きな声で笑うのを忘れない。なかでも女の笑い声がひとときわ高い。アイゴッ、なかなかやるわよ、これ見てごらん！ 奥の

座席のほうで、竹かごのなかの雞が羽をばたつかせ悲鳴をあげていたが、いつのまにか、同じかごの真つ赤なとさかをした雄雞が雌雞の上に羽をひろげて乗っかけているのだった。さすがに一人の女が顔を赤くしておいっと笑いながらかごを大きく揺さぶった。雞が驚いてかごのなかで飛び上った。へへえつ、姐さん、放つといてやりなよ、わが身にもなつてみなて……、こいつはわしら人間のいうことをちゃんと心得てるだよ、男が笑いながらいった。

バスは木炭車でおんぼろだったが、しかし無蓋のトラックがバスの代用車になっているこのごろでは（植民地時代のバスがほとんど老朽化して無くなり、その補給がきかなかった）、天井と囲いがあつて風雨にさらされずにすむだけ、一等車なみというところだろう。道が悪いので、南承之のまえの二つの荷物が酔っぱらいのように左右にぐらぐら揺れてじつとしていない。と、瞬間ぐらりと傾いて南承之の膝を強く打ちながら床に落ちた。南承之と隣りの農夫が立ち上りそれをもとの位置に戻す。荷物を積み重ねながら二人は何かをしゃべる。いまでも何回かそのようにしてしゃべった。しゃべりながら笑う。やがて五十がらみのずんぐりした軀のその男は席に坐つて、たばこを紙に巻きながら話しかけてくる。先刻までは女たちの話に耳を傾けていたのだった。麦わら帽のような恰好の竹製のペレレイのつばが南承之の帽子に触れ、酒臭い息がまともにかかった。無精ひげがごわごわの無愛想ながっちりした顔だが、

笑うと大きな充血した眼がやさしい。南承之は、どんと揺れた拍子に膝の上に葉をこぼしながら、不器用にそれを拾つてたばこを巻く農夫の土のしみた大きな手を見る。それは錆びた小さなバツクルのような爪を持った手だった。

わしはああいう話には興味がないでな。ふと、何か思ひ出すような農夫の表情に苦い笑いが浮かんだ。そして、顔をぐっと近づけながらしゃべりだした。あんたはまだ若いですなあ、若いのはよいことだ。うむ、もうじきにわしのせがれの、そいつは二番目だが……ほんととは二番目じゃねえ、三番目だ。ほんとの二番目は小さいときに死んじまつたんでな、だからほんととは三番目の、そいつの結婚式があるだ。うん、まだ結納もしてはいないんでな、そういうわけで正直のところ、ほんとうはもうちよつと先の話だがね……。だけどな、もう嫁はちゃんと決まっていますだよ。せがれの奴もいつのまにか二十が過ぎて四になつてしまったが、なかなかようできた奴でな、うむ、それが結婚をしたがらねえんだよ、全く。しかしそうはいかんぞ。その嫁にくる娘さんというのが、またわしの息子よりようできてるんだからな、器量もよければなかなか親孝行もんときてる。だけど人間がなんぼようできておつてもな、世の中がこれじゃどうともならん。わしは十六（数え年）で結婚して、結婚したその日の晩になつて四つ年上の嫁さんに服を脱がしてもらったがな、それに嫁さんの顔もその晩になつてはじめて拝ませてもらつたような次第だった、それもランブ

の下でな。はっはは、それでもちゃんとやることはやったもんで、その証拠に明くる年にはれっきとしたおチンチンのついた奴が生まれてきただよ。そいつはもうとつくの昔に嫁をもらって子供まである。孫はいま漢垂れ腕白の小學生だて……、そうだ、孫の奴が学校へ入ったのは解放前だったけ。解放前の、ちょうどわしらのこの国が独立する一年まえで、まだ日本国が一生懸命に負け戦争をやったときだった。忘れもしねえ、そのときはな、学校という学校には日本の兵隊がやって来て泊りこんでな、あいつらに占領されて勉強なんかできはしなかったぞ、そうだろう。……ほうれ、あすこに、沙羅峯が見えてきただろう。わしはあの沙羅峯の峠を越すときはいつも思い出す。わしはあの時分、それはもう四、五年になるけれども遠いところからみんないっしょに、村を空っぽにして男も女も老人も子供もみんないっしょに狩り出されて沙羅峯までやって来た。ふかした芋を入れた弁当かごと鎌を持ってな。沙羅峯の芝生をな、沙羅峯の芝はそれやりっぱで有名だった、そいつを一尺四方くらいの大きさに切り取るわけさ。もちろんただ働きでこき使われた。だれにこき使われた？ いわなくとも分かるだろ。それや、日本の軍隊に決まっているさ。いまはアメリカの兵隊がいるだが、あのときは倭奴の兵隊が、この狭い島に十万もおったという話だよ。たくさんいるにはいたが、そんな兵隊の数までは知らなかったがな、そいつらがわしらをこき使ったわけだ。沙羅峯だけで一日

何百人という人間が、陰暦の五、六月というのはいちばん忙しいときだよ、それを自分たちの草刈りや野良仕事は放っぽり出して、まるで蟻みてえに沙羅峯の麓に集まってきて、芝を四角い形に白い根っこをたっぷりくつつけたままに切り取った。根っこがひげのようにたっぷりついてねえと、倭兵の監督にやられるんだ。初伏の暑い盛りころで、爺さんや婆さんや子供たちが何人も倒れてったもんだ。おかげで沙羅峯の芝生は、それは寝ころぶとむんむん草いきれのする全くすばらしい真っ青な芝生だったが、何かの生き物の皮をひん剥いたみてえに真っ黒になってしもうて、見られたもんじゃなかっただよ、山火事のあとの黒焦げになった山肌とおんなじでな。女たちが泣きよったが、わしも地肌を剥いちまった沙羅峯の醜い姿を見たときにはさすがに涙が出てきたなあ。ほんとに涙が出た。倭奴たちはいつ負けるのか、いつ戦争が終ってこいつらが島から出て行くのか、腰を折り曲げて芝を切り取りながらわしらはひそひそと話し合ったもんだ……。巻きたばこの唾が乾いてきたので、紙がはぐれはじめた。農夫はもう一度それを唇に当てがって唾で濡らし、火をつける。……さてさて、こんどはそいつを積み出す番だ。新作路の道端に瓦みてえに一枚一枚積み上げて並べる、まるで万里の長城を築いたようなもんさ。そいつを順々に牛車に積み込む。芝は重たくて全く瓦どころじゃねえ、土がたっぷりくつついてるんだからなあ。その重たいのを積み込んだ牛車が一行に何台も何

台も続々と並んで沙羅峯の峠をあえぎあえぎ越えて、城内のほうへ向って行った。わしらが牛の尻を引っぱたくだよ。かわいそうに……、でねえと、日本の兵隊が棍棒で牛を殴りつけてくるんだからな。アリラン、アリラン、アラリヨというが、これがアリラン峠というもんだ。朝鮮のどこにもあるアリラン峠というもんだ、この峠を越えるというのはなあ。城内に入っても牛車の行列はまだ沙羅峯から続いているんだが、こんどは城内を通り抜けてあの練兵場へ、つまり飛行場へと行くんだ。いまはそこにアメリカの軍隊がおるが、当時は日本の軍隊がいただ。そいつらが飛行場を拡張するために畑や家を文句なしにぶっこわして地均した跡へ、芝を持って行ってぎっしり敷きつめるという段取りなんだ。それで飛行場まで運んで行った。芝を敷くのがまた大変だった。それはその方面の部落の人間たちを狩り出してやっただが、奴らの飛行機を飛ばすのに、わしらはこの裸の手で何万、何十万枚の座布トンを敷くように芝をぎっしり敷きつめて、その上を走らせてやっただ。どれも倭奴の兵隊が剣付き鉄砲を持って監督していたが、いわゆる勤勞奉仕というやつで、供出のなかの勞力供出の一つだったわけ……。それだけなもんか。供出、供出で、穀物が強制的に取られる。芋の供出はどうだ、あの芋を薄く切って乾したやつだよ、アルコールを作るんだ。あれを一等とか二等とかいってな、城内まで一日がかりで運んで行っても、検査員のご機嫌をそこねるともう三等品になつてし

まうというわけだ。先祖代々使ってきた真鍮製の祭器チヌギをも供出させられた。だれが正直に出すもんかね、だけでも牛二頭がいるのはごまかしがきかないんで一頭はかわいそうに供出させられて倭兵の食べる肉になったもんだよ。沙羅峯を見てるうちに昔を思い出してしまつてな。……あんたは子供はいるのかね。……なあに？ 独りもんだと、これは驚いた。そうは見えんがね。ふふん、それじゃ老總角オウソウカク（独身者）というところだ。この世の中は、こんどはアメリカがやって来てますます住みにくくなつてしまつたが、人間は長生きせねばならんとわしは思つとるだ。人間の命がどうなるか分からん世の中になつてしまつたがために、ますます長いこと生きのびねばならん。代々孫々長生きするにはまず嫁を取ることだ。嫁を取つて種を植えねばならんて、畑に種をまくようにな。いまよりましな世の中を見るためには、わしらの種を絶やしてはならねえだ。せがれの結婚をせくわしの心には、まあそんな氣持もあるつてわけだ。それが親の責任というもんだ。あいつにはこの親の心が分からねえ、あんたにもそういう親心が分かるかな。なあに、あの野郎はこのおれをちよっぴり怨んでるんだよ、いまでも。それがわしには分かるんだから……。わしらは死んではならん、死んではならねえだぞ。あんたもちゃんと早く嫁を取つて……あとは種を植えて委せとけばええ、それが人間の生きがいというもんだよ。おつ母はいるのかね？ ふうん、それではおつ母さんも心配してるだろ。

農夫は自分の姓名やその洞^{わう}里を相手に告げるだろう。そして村に住んでいる親族家門のことや、村に起こった何かのうわさ話をするかも知れない。そしてこんどは、相手の姓を訊き、洞里を訊き出すだろう。もし自分が知っていたり、自分と同じか近くの村だったら話ははずむ。そして相手の一族家門のことなどを話題にするのは間違いない。それがこの島の慣習であり礼儀なのだ。名前もいま住んでいるその洞里も明らかにしたくないそばの青年には関係なしに、農夫はこの島の生活慣習に忠実だろう。

わしはこれからせがれのところへ行くだよ。つまり二番目が城内に住んでるんだ。こいつは百姓がきらいでな、それで家をとび出したが、でもな、しっかりした奴でな、無口であんまりしゃべらねえが、何を考えてるか分からないくらい心の底が深い奴で見どころがある。そのせがれに会いにな、久しぶりに城内に行くってわけだ、麦を担いでな……うむ、あんたもわしのせがれみてえに、あんまりしゃべらねえほうの人間だな。あんたはどっから来たのだね？なに、K里？うむ、あすこはいいとこだて、水もいいが砂浜がまたなんともいえぬくらい真っ白できれいだ。それにその沖じゃ鰯^{いわし}がとれる。鰯の群れが海を銀色にふくらませて上ってくるだ、脂の乗った生きのいいのがな、それを追っかけて海豚の群れがやって来るだて、海豚が人間みてえに口笛吹いてやって来るだて、鷗^うが群れて鳴いて、全くうるせえくらいに……。

農夫は自分の姓も相手の姓も、そして洞里のことなど口にしなかった。農夫はこの島の生活慣習の一つを忘れたのかも知れない。いや、そのとき突然、かごのなかの雄雞がときをつくって人々を驚かせたが、そのせいかも知れなかった。運転手さえ振り向きかけたが、前方からトラックが走ってきたのでやめてしまったのだ。はっははあ、夜中にでもときをつくったら、いとしい人がびっくりして逃げてしまふよな、こら、バカ雞め、市場へ行ってときをつくるな、奥さんがたは買ってくれねえからな。人々はどっと笑った。農夫もひょうきんな雄雞の鳴き声のほうに顔を向けて笑ったが、それで忘れてしまったのかも知れない。

しかしそれにしても不思議なことだ。これだけ話し合っ
て、それは農夫のほうから一方的に話しかけはしたのだが、互いに自己紹介もしないで、尻切れトンボのようになってしまったのはどうしたことだろう。もう、そのような慣習がこわれはじめているのかも知れない。このごろの島の若者たちが変名を使ったりして、すでに自分の村に住みつかなくなっていたりしているのを農夫は知っているのかも知れない。いや、強いていえばこの農夫自身がまた何者であるかも分からないこのごろの世の中だ。ともかく南承之としてはそのような煩わしいことは避けたかった。K里といったのは嘘だった。

